西南学院大学国際文化研究科長

松原　知生　様

博士学位請求論文審査結果報告書

2025 年 2 月 19 日

学位申請者　　22DK001　　李　斯琪

論文題目　　張恨水の小説における創作思想の変遷に関する研究

上記論文を審査した結果、博士学位を授与するに十分な水準にあることを認めます。

審査委員

主査　新谷　秀明

副査　西村　将洋

副査　梅村　卓

＊「審査報告要旨」を添付します。

博士学位論文審査報告要旨

学位申請者　　22DK001　　李　斯琪

論文題目　　張恨水の小説における創作思想の変遷に関する研究

本論文は、中華民国期において人気を博した通俗小説作家・張恨水（1895-1967）について、その創作思想の変遷に焦点を当てて論じたものである。中国の明清時代には章回体の白話小説が流行するが、五四新文化運動を経た近代以降にも、その流れを受け継いで章回体小説を書く作家は多く存在した。文学界の変革を主張する五四時期のいわゆる新文学作家たちはそういった通俗作家を「鴛鴦胡蝶派」と称して批判的に見ていたが、張恨水は鴛鴦胡蝶派の主要作家と見なされながらも作品に新機軸を打ち出し、独自の風格を構築した作家として、近年再評価されつつある。

本論は「はじめに」、序章、第１章から第４章、および終章から構成されている。以下、各章ごとに内容を概観していきたい。

筆者の李斯琪氏は、「はじめに」でまず張恨水がいかなる作家か、その概要を簡潔に紹介し、さらに序章では研究の背景、先行研究、および研究の目的と意義について述べている。先行研究はおもに中国での研究となるが、1961 年の夏志清『中国現代小説史』における張恨水への言及を端緒として、80 年代以降には范伯群の本格的な通俗文学研究など、張恨水をめぐる研究がにわかに隆盛していく過程を追っている。そして筆者は本論文の目的を、①張恨水が鴛鴦胡蝶派とされた原因はなにか、②新文学派の批判にさらされた原因はなにか、③張恨水作品はどのように変化したか、④張恨水が伝統文化に執着する理由は何か、⑤張恨水の文化をめぐる立場をどのように評価すべきかの５点の解明に絞ることを明記している。

本論に入り、第１章では『春明外史』(1924)と『啼笑因縁』(1930)を中心に張恨水と鴛鴦胡蝶派との関係、および両作品における男性主人公の「陰柔」な気質について考察する。典型的な鴛鴦胡蝶派作品である『花月痕』、『玉梨魂』と張恨水の初期作品『春明外史』、および代表作である『啼笑因縁』を比較し、三角関係がストーリーの中心となっていることや、男性主人公が中国の伝統文化に通ずる「陰柔」な性格として描かれていることを指摘する。そうしたことからこの時期における張恨水の作品は確かに鴛鴦胡蝶派の要素を備えている

と筆者は結論づけている。

第２章では『落霞孤鶩』(1931)を取り上げ、『啼笑因縁』から『落霞孤鶩』への創作意識の変化を読みとろうとする。筆者によれば『落霞孤鶩』は「社会の闇の暴露」に重点を置いた作品であり、『啼笑因縁』で描かれたような上流社会はもはや登場せず、もっぱら下層社会の女性に焦点が当てられている。つまり張恨水は『啼笑因縁』に対する新文学派からの批判をふまえ、〈娯楽性を重視する立場から写実性と倫理性を重視する立場へと移行した〉のだと述べる。しかし新文学派はそれでも依然として『落霞孤鶩』を恋愛物語とみなし、その社会性を評価することはなかった。それは張恨水が「啓蒙」「革命」などの題材を扱わず、個人の心情を描く中で小説の倫理的価値を高めようとしていたからだと筆者は述べている。

第３章では 1930 年代における「“伝統”と “現代”の衝突」というテーマのもとで、『似水流年』『現代青年』の２作品を取り上げながら、張恨水の取った立場について考察している。筆者はこの章の結論として、〈張恨水は伝統に固執することもなければ、「現代」を主張する新文学派に完全に同調することもせず、折衷的立場をとった〉と述べている。

第４章は抗日戦争期（1937-45）における張恨水の創作思想を、伝統文化と関連付けながら論じている。日中戦争勃発後、中国の文芸界では抗日統一戦線の結成が呼びかけられ、中華全国文芸界抗敵協会が設立されるが、張恨水はその理事の一人としての役割を担うこととなる。「救亡」(中華民族を存亡の危機から救う)という共通の課題のもとで、張恨水は「侠」という伝統文化を発揚する一方、愛国心と繋がる伝統文化である「忠」を称賛した。初期の作品に見られた「陰柔」な人物像から脱却し、その対極に位置する「陽剛」な英雄的人物を描くことで時代の要求に応えようとした、というのがこの章における筆者の結論である。

以上のように第１章から第４章まで時代を追って具体的な作品から創作思想の変遷過程を抽出したのち、終章ではそのまとめとして、年代による思想の変化を一覧表にし、わかりやすく提示している。さらに、張恨水に対する総合的な評価として、「文化保守主義者」という称号を与えている。その理由を筆者は、〈張恨水の真の価値は、近代化がもたらした社会問題、あるいは国家・民族存亡の危機に直面した際、中国には依然として「伝統」という否定できない「固有の血」が流れていることを認識し、伝統精神に再び光を当てようと試みたことにこそある〉ためだと締めくくっている。

論文全体として言及している事項が多岐にわたっており、上記以外にも細かく見れば様々な論点が存在するが、大筋のところは以上のようにまとめられるだろう。

本論文の学術的価値はまず何よりも1920年代から抗戦期までという長いスパンの時代状況を視野に入れ、張恨水の創作思想が変化していく過程を明瞭に描き出したことにある。多作で知られる張恨水がこの期間に生み出した作品は相当な数量になる。しかもそのほとんどは長編小説である。本論文内で言及されている作品だけでもかなりの数にのぼるが、少なくとも日本国内では一篇の論文でこれほど広範囲にわたって張恨水を論じた研究はほかに見られない。

次に価値が認められるのは、中国伝統文化との関連性に注目し、「陰柔」「陽剛」「忠」「侠」等の概念を援用しながら、張恨水が伝統文化に対しては一貫して保守的であったと結論づけた点である。この結論の是非についてはなお検討が必要かもしれないが、筆者は本論文において丁寧な読み込みと大胆な考察によって一つの重要な観点を導き出していると評価することができるだろう。

多数の作品を視野に取り込んでいる一方で、具体的な作品に密着して分析していくという手法はこの論文ではほぼ採られていない。そのためか、概念が先にあってそこに典型的な作品を当てはめていったような印象がどうしても拭えない。公開審査の席上でもそのような主旨の意見があった。この点は筆者に今後の成長を期待したい部分である。

以上述べたように、多少の未完成な側面が認められるものの、総合的に判断して、李斯琪氏の論文は博士学位を授与するに値する水準を有している。審査委員一同の承認を経て、ここに報告する次第である。

2025年2月19日

審査委員

主査　新谷秀明

副査　西村将洋

副査　梅村　卓